

## まえがき

近年、文化財を分析化学的手法によって調査し、その結果がマスコミに取り上げられることが多くなってきた。これまで考古学、歴史学、美術史学など人文科学的な学問が先導してきた分野において、分析化学をはじめとした理化学的なアプローチによって客観的な情報を提示できるようになったことは大変喜ばしいことである。人文科学研究者が機器分析を自ら行い、その結果を学術論文や学会などで発表することも少なくない。しかし、分析化学が専門でない研究者や学生が、分析化学の手法や装置の特性を十分に理解して結果を解釈しているかという、とても十分であるとはいいがたいのが現実である。

本書は、分析化学を志す学生や、分析化学が専門でない研究者を対象として、文化財の分析を行う際の基本的な考え方、分析機器の特徴、そして実際の分析例を紹介しながら、分析結果の意味するところをわかりやすく解説するために刊行されたものである。現在、文化財の分析に使われている分析手法は多岐にわたるが、それらを網羅的に紹介することは本書の目的ではない。本書では、両著者が所属する東京文化財研究所・奈良文化財研究所という我が国における文化財研究の中心的機関から近年発表された分析調査の中から、本書の読者にふさわしいと思うものを選択して紹介している。

「文化財」という言葉を聞いたとき、何をイメージするかは人によって大きく異なる。しかし、「文化財」という用語は文化財保護法によって明確に定義されており、①有形文化財、②無形文化財、③民俗文化財、④記念物、⑤文化的景観、⑥伝統的建造物群の6種に分類される。本書のタイトルは「文化財分析」と名付けたが、本書で取り上げたのはこれら文化財のうちの主として有形文化財だけである。有形文化財、すなわち形あるものはいつか必ず朽ち果てるのが常である。しかし、朽ち果てて無くなるまでの時間をできる限り長く延ばし、傷んだ部分は修理しながら後世に伝え続けるために研究する学問、「保存

科学」という学問が存在している。保存科学の主たる研究対象は唯一無二の「もの」ばかりであり、その主目的はその「もの」をいかに長く存在させ続けるかというただ一点に集約される。この目的のために考えられる限りの方策が検討され、さまざまな学問分野の知識が適用される。その中の一つが本書で紹介するような分析化学的手法による調査研究である。

しかし、保存科学という学問あるいはそれに基づいた考え方自体、たかだか50年程度の歴史があるだけで、決して成熟した学問体系を成しているわけではない。研究者も少なく、限られた人材・予算・知識の中で試行錯誤的に日々研究に取り組んでいる状況である。

本書では、その研究の一端を紹介するだけであるが、本書の読者の中から、こんなところにも分析化学が役に立つ分野があるんだということに気が付き、文化財の世界あるいは保存科学の研究に携わってみようとする若者が一人でも出てきてくれることを願う次第である。

2018年7月

早川泰弘・高妻洋成